様式Ｃ－１９

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成 25 年 6 月 14 日現在

機関番号：８０１０１
研究種目：基盤研究（B）
研究期間：2009～2012
課題番号：２１４０１０４７
研究課題名（和文）　明治期北海道におけるアイヌ・西洋人・エージェントをめぐる文化人類学的研究
研究課題名（英文）　Cultural Anthropological Studies on the Relationship among the Ainu, Euro-American Researchers and Agent Persons in Hokkaido in the 1900’s

研究代表者
出利葉浩司（DERIHA　KOJI）
北海道開拓記念館・学芸副館長
研究者番号：40142088

研究成果の概要（和文）：
アイヌ民族は、白人種に似た風貌から、19～20 世紀初頭のヨーロッパにおいて関心がもたれ、おおくの研究者らが明治年間の北海道を訪れては器物を収集していった。かれらは、同時に調査記録のみならず日記類や書簡類などの情報を残している。本研究では、かれらが残した情報に注目する。そして、調査・収集という人間同士の交渉の現場で、アイヌの人びとと欧米人研究者とのあいだにおこったできごとを描き出そうとする試みである。
研究成果の概要（英文）：
The Ainu are an indigenous people of Japan and European scientists had been interested in their features and culture because of the similarity of physical features between Caucasians and the Ainu. Many scientists visited and collected Ainu materials from the late 19th century to the early 20th century. Also huge numbers of documents like field notes, diaries and correspondences were left in European and American museums and archives. We pay attention to what they wrote on the documents and analyze the contents to describe what had been happened between researchers and the Ainu at that time from practical viewpoints.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
2009 年度	3,700,000	1,110,000	4,810,000
2010 年度	3,700,000	1,110,000	4,810,000
2011 年度	3,300,000	990,000	4,290,000
2012 年度	1,900,000	570,000	2,470,000
総　計	12,600,000	3,780,000	16,380,000

研究分野：人文学 C
科研費の分科・細目：文化人類学・民俗学
キーワード：アイヌ、F.スター、B.S.ライマン、S.キュリン、H.ヒラー、R.ヒチコック、N.G.マンロー、V.N.ヴァシーリエフ、博物館コレクション、民族学調査

１．研究開始当初の背景

アイヌ文化にかかわるさまざまな資料について、とくに民具類についてヨーロッパ、北米、ロシアなど海外にある博物館に良好なコレクションが保管されていることはすでに知られていた。これらについては、1980 年代初頭から悉皆的な調査がおこなわれていて（たとえば在ヨーロッパ・コレクション群については J.クライナー教授、在北米コレクション群については小谷凱宣教授、在ロシアコレクション群については荻原眞子教授が中心となってチームを編成し、調査をおこなっている）、この経緯については、いくつかの報告書が刊行されており、それらをまと

めたものとして「海外のアイヌ文化財：現状と歴史」（小谷凱宣編 2004、南山大学人類学研究所）がある。

また、その成果をもとにした展示会なども開催されている。たとえば、「海を渡ったアイヌの工芸－英国人医師マンローのコレクションから」（2002 年、北海道開拓記念館ほか）、「ロシア民族学博物館のアイヌ資料展－ロシアが見た島国の人びと」（2005 年、北海道開拓記念館ほか）、「アイヌの工芸－ペンシルベニア大学考古学人類学博物館ヒラーコレクション」（2008 年、旭川市博物館ほか）など、（財）アイヌ文化振興・研究推進機構が企画した展示会などをあげることができる。

ところで、このような博物館資料をもとにした調査・研究活動が目的としたところは、おもに物質文化研究から見た過去のアイヌ文化や社会の復元、つまり物質文化をもとにした民族誌の記述であった。これは日本国内の博物館にあるアイヌ民具コレクションには十分な付帯情報をもつものがすくないこと、さらに集められた年代も不明であるかあるいは比較的新しいものがほとんどであることから必然的に導かれた対抗的な研究課題であった。

在欧米の博物館が所蔵するアイヌコレクションは、民族学研究者や博物館関係者が収集したものがおおい。かれらの収集記録も同時に保存されており、資料に関するさまざまな付帯情報を豊富なものとしている。さらに収集年代も明治年間を中心とした年代のものがほとんどである。このことは世代間の技術継承が生活のなかでおこなわれていた時期に作成されたことを意味しており、製作技術研究にとって良好な資料となりうるものである。

さいわい、研究代表者もこうした海外調査に参加することができたが、そこで考えたことは、収集された「資料」とその民族誌研究における「今後の活用」の意義もさることながら、それとはべつの「収集時点」のさまざまな「できごと」を物語る「情報」の活用であった。つまり、博物館が保存してきた、収集者の記録類、写真類や日記、往復書簡などがもつ「情報」を、個々の資料の「民族誌的」付帯情報としてのみ活用するのではなく、個人としての収集者とアイヌの人びとのあいだにおこった資料の収集をめぐるさまざまな「できごと」を読み解くための資料として活用することであった。

２．研究の目的

このように、本研究課題はそれまでおこなわれてきた海外にあるアイヌ資料調査研究を基礎にして、そこから派生する課題として設定されている。

日本が西洋近代を積極的に受容した明治年間に起こったアイヌの人びとと外国人との出会いの場面において、社会・文化的背景を異にしてきた人びとが、どのように出会い、交渉し、互いの所有物や知識を譲渡し、あるいは交換しあったのか。それをこれまで人類学が用いてきた客観主義的あるいは規範的概念によらずに描き出すことが本研究の目的である。社会的背景をもつ人間の日常的行動と相互のもつれ合いが考察の対象となる。

取り上げる外国人は、なんらかの調査記録や書簡類を残していることが条件であり、具体的には、R.ヒチコック、H．ヒラー、B．ライマン、F．スターらのアメリカ人、N．G．マンロー、V.N. ヴァシーリエフら英国やロシアからの来道者らが対象となる。また、出会いは調査や旅行先だけではないことにも注意する。すなわち同時期におこなわれた博覧会を「できごと」の場としてとらえる。これによりアイヌの人びとが参加したふたつの万国博覧会も対象となる。

さらに、小谷部全一郎や J.バチェラーなど、出会いを仲介していた人物にも、エージェントとしての役割という点から接近を試みたい。従来の研究では、アイヌと調査者・資料の収集者という二項対立という枠組みで捉えてきたが、これでは出会いの場面で双方をいききした仲介者の役割を見失っていたと考えられるからである。

本研究をおこなうことで、アイヌ民族とその文化の研究において、新しい方向性を模索できるのではないかと考えている。

３．研究の方法

本研究は、(1)基礎的史料の整備と、それをもちいた(2)分析的な研究にわかれる。

(1) 本研究が分析の対象とする基礎的な史料は、研究者や資料収集関係者により残された調査記録、日記、書簡、論文草稿および写真類などであるが、これらは海外の博物館、文書館、図書館などに保管されている。また、印刷物としてすでに公開されているものはきわめてすくない。

そこで、こうした史料の調査、複写をおこない、関係者がより利用しやすい状況におくことが本研究の出発点となるため、現地において調査をおこなう必要がある。

史料はペン書き、鉛筆書きのものがおおく、文字が薄れているため、コピーでは判読できないものがおおい。また、経年変化により紙媒体そのものが劣化している場合もある。よって、より写実性があり保存性もあるデジタル複写を、現地においておこなった。

(2) つぎに、デジタル複写を素材として、判読、翻刻（筆記体文字をタイプする）作業は、各研究者が国内でおこなった。難解文字もあり、再度原典に当たったものもある。

こうして得られた一次史料をもとに、人びとの「出会い」とそこでの「できごと」について、読み取っていき、社会的背景をもつ人間の日常的行動と相互のもつれあいが考察の対象となる。そこに現れる誤解、不満、葛藤、合意、認識の揺らぎなどをまず抽出することになる。ここでの作業において人類学的実践論が有効なアプローチ方法と考えているが、メンバーに強要はしていない。

(3) 調査をおこなった機関などについては次のとおりである。

① フレデリック・スターおよびセントルイス万国博覧会にかんする史料

シカゴ大学図書館・フィールド自然史博物館（イリノイ州）・ワシントン州立大学博物館・ワシントン州立大学図書館・オレゴン大学図書館、オレゴン大学美術館・カリフォルニア大学バークレー校図書館

② ベンジャミン・ライマンにかんする史料

マサチューセッツ州立大学図書館・スミソニアン協会文書館（ワシントン,D.C.）・アメリカ哲学協会文書館（ペンシルベニア州）

③ ロミン・ヒチコックにかんする史料

スミソニアン協会文書館・国立自然史博物館（ともにワシントン,D.C.）

④ スチュアート・キュリンにかんする史料

ブルックリン美術館（ニューヨーク州）・ペンシルベニア大学附属考古学人類学博物館文書館

⑤ ハイラム・ヒラーにかんする史料

ペンシルベニア大学附属考古学人類学博物館文書館

⑥ チャールズ・ロングフェローにかんする史料

ロングフェローハウス（マサチューセッツ州）

⑦ ニール・ゴードン・マンローにかんする史料

王立人類学協会（RAI）・国立スコットランド博物館・大英博物館

⑧ ヴィクトル・ニコラエヴィッチ・ヴァシーリエフにかんする史料

ロシア国立民族学博物館（サンクト・ペテルブルグ）・ロシア極東科学アカデミー研究所（ウラジオストク）

⑨ 日英博覧会にかんする史料

王立人類学協会（RAI）・大英博物館

４．研究成果

海外の博物館が所蔵するアイヌ文化資料に関連するさまざまな記録類について、デジタル撮影できたことを、まず成果としてあげておきたい。さきにふれたように、これらが記録されている紙媒体は、非常に脆弱なものもあり、資料保存上からもデジタル撮影できたことは幸運であった。

保管されていた史料の量は、想定以上であり、研究などで公表したものはその一部に過ぎない。現在、それぞれがリスト作成、概要の記載にむけ作業中であり、これは研究期間を越えるが、なんらかの方法で公開すべきだと考えている。

集められた史料をもとにした研究は、翻刻作業に手間取り、十分な成果を上げたとはいいがたい。それでも、スター、ライマン、マンロー、ヴァシーリエフについては、これまでより踏み込んだ議論ができた（発表論文等参照）。また、セントルイス万国博覧会、日英博覧会でのできごとについては、関係者を含めた一般向け講演会というかたちで、成果の一部ではあるが還元できた。また、ヒチコックが収集した資料や写真についても、撮影地である斜里において、一般向けの普及活動をおこなうことができた。

ドイツのライプチッヒ民族学博物館所蔵資料については、（財）アイヌ文化振興・研究推進機構の展示会と重なったため、成果の一部を展示会および図録というかたちで公開することができた。

今後、本研究はここで終了するのではなく、集められた史料のさらなる分析・研究と公表は、継続しておこなっていく必要があると考えている。デジタル撮影された史料については、いまのところ研究チームのみの許可申請を得ている。今後、これらの活用にむけて、翻刻、翻訳、出版は考えていくが、同時に、デジタル記憶媒体の保管・活用についても、オリジナル史料の所有者と協議していく必要がある。

５．主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計８件）

(1) 宮武公夫、現代の人類学－ホーリスティックな存在の人類学へ向けて－、社会人類学年報、査読有、38 巻、2012、1－32。

(2) 財部香枝、B.S.ライマンのアイヌ資料収集に関する小論、北海道開拓記念館研究紀要、査読無、41 号、2013、147－152。

(3) 田村将人、V.N.ヴァシーリエフのアイヌ物質資料の収集過程に関する資料、北海道開拓記念館研究紀要、査読無、41 号、2013、153－168。

(4) 出利葉浩司・田村将人、第 157 回テーマ展「小嶋コレクションにみるアイヌ文化の世界　なぜ民芸品店主が民具を集めたのか？」を企画して、北海道開拓記念館研究紀要、査読無、40 号、2012、235－256。

(5) 出利葉浩司、マンロー・テクストはなにを「返還」するのだろうか－マンロー関係資料デジタル化プロジェクトの今日的意義－、

国立歴史民俗博物館研究報告、査読有、168集、2011、63－82。
(6) 田村将人、1912年、サハリン先住民と研究者、行政の三者に関するメモ、北海道開拓記念館研究紀要、査読無、39号、2011、117－124。
(7) 田村将人、服部文庫公開シリーズ5　ニヴフ語調査に関する樺太庁敷香支庁土人事務所との往復書簡、北海道立北方民族博物館研究紀要、査読無、20号、2011、55－80。
(8) 田村将人、書評　北海道大学北方研究教育センター（編）『知里真志保　人と学問』、北方人文研究、査読有、4号、2011、99－103。

〔学会発表〕（計3件）
(1) 山崎幸治、文化人類学的研究とアイヌ研究：北海道での実践から見えてくる課題、日本文化人類学会、2011年6月12日、法政大学市ヶ谷キャンパス。
(2) 山崎幸治、アイヌ民族との協同による博物館展示、日本文化人類学会第44回研究大会、2010年6月12日、立教大学新座キャンパス。
(3) 出利葉浩司、地域と文化の創造－アイヌ文化と博物館　報告３、シンポジウムⅠ『地域と文化の創造－アイヌ文化と博物館』（座長　本田俊和）、第57回全国博物館大会、2009年10月1日、旭川市大雪クリスタルホール、日本博物館協会主催事業。

〔図書〕（計15件）
(1) DERIHA,Koji "Trade and Paradigm Shift in Research on Ainu Hunting Practices" In Beyond Ainu Studies: Changing Academic and Public Perspectives (Mark J. Hudson, Ann-Elise Lewallen, Mark Watson eds.), 2013 (in press), University of Hawai'i Press
(2) MIYATAKE,Kimio "Ainu in London 1910: Power, Representation and Practice of the Ainu Village" in Commerce and Culture at the 1910 Japan-British Exhibition Centenary Perspectives (Ayako HOTTA-LISTER & Ian NISH ed.), 2013, 104-122, Grobal Oriental.
(3) 出利葉浩司、北海道の先住民族アイヌは環境とどのようにつきあったのだろうか－アイヌの暮らしが私たちに語るもの－、（吉田・荒井・深見・藤井編）持続可能な未来のために－原子力政策から環境教育、アイヌ文化まで、2012、115－136、北海道大学。
(4) 出利葉浩司、博物館と政治的アイデンティティー北海道の地方博物館を例に－、（太田好信編）政治的アイデンティティの人類学、2012、138－160、昭和堂。
(5) 山崎幸治、『民族学研究』におけるアイヌ研究－終戦から昭和四〇年代まで－、（ヨーゼフ・クライナー編）『近代〈日本意識〉の成立－民俗学・民族学の貢献』、2012、360-375、東京堂出版。
(6) YAMASAKI,Koji, "Indigenous Peooles and Museum Materials － Lessons from Preparing for the Ainu Culture Exhibition" In teetasinrit tekrukoci-The Handprints of our Ancestors (Koji Yamasaki, Masaru Kato, Tetsuya Amano eds.), 2012, 92-96, Hokkaido University Museum / Hokkaido University Center for Ainu & Indigenous Studies.
(7) 山崎幸治、古写真の調査方法に関する覚え書き－千歳地域におけるアイヌ関係古写真調査から－、（加藤克編）『大学博物館所蔵古写真の現代的意義に関する研究』2012、37－39、
(8) 出利葉浩司、とる/エキムネ/レパ/チェプコイキ、（財　アイヌ文化振興・研究推進機構編）『千島・樺太・北海道　アイヌのくらし－ドイツコレクションを中心に－』、2011、108、（財）アイヌ文化振興・研究推進機構
(9) 山崎幸治、いのる/イノミ、（財　アイヌ文化振興・研究推進機構編）『千島・樺太・北海道　アイヌのくらし－ドイツコレクションを中心に－』、2011、112、（財）アイヌ文化振興・研究推進機構
(10) 田村将人、千島アイヌの歴史、（財　アイヌ文化振興・研究推進機構編）『千島・樺太・北海道　アイヌのくらし－ドイツコレクションを中心に－』、2011、113－114、（財）アイヌ文化振興・研究推進機構
(11) 出利葉浩司、N.G. マンローのアイヌ文化研究とそのコレクション－『海を渡ったアイヌの工芸展』を中心に－、（南山大学人類学博物館編）南山大学オープンリサーチセンター2010年度年次報告書　付編　研究会・シンポジウム資料、査読無、2011、96－103、南山大学人類学博物館オープンリサーチセンター。
(12) 出利葉浩司・田村将人、（北海道開拓記念館編）小嶋新三・慧子コレクションについて、小嶋新三・慧子コレクション資料目録北海道開拓記念館一括資料目録第40集、査読無、2011、56－58。
(13) 宮武公夫、海を渡ったアイヌ、2010、238、岩波書店。
(14) 宮武公夫、お札博士の東アジア行脚－人類学者フレデリック・スターの東アジア調査資料から、（北村清彦編）北方を旅する、2010、北海道大学出版会、171－199。
(15) Greg Robinson and Yujin Yaguchi, eds. Jenichiro Oyabe "A Japanese Robinson Crusoe", University of Hawai'i Press, 2009.

〔その他〕
(1) 出利葉浩司、海を渡ったアイヌの人びと

明治年間にセントルイスでおこったできごと、むかわ町老人クラブ講演会（関係者への情報公開）、2012 年 11 月 10 日、北海道むかわ町四季の館。むかわ町老人クラブ主催事業。
(2) 宮武公夫、海を渡ったアイヌの人びと明治年間にロンドンでおこったできごと、むかわ町老人クラブ講演会（関係者への情報公開）、2012 年 11 月 10 日、北海道むかわ町四季の館。むかわ町老人クラブ主催事業。
(3) 出利葉浩司・宮武公夫、海を渡ったアイヌの人びと　明治年間にセントルイスとロンドンでおこったできごと、2012 年 10 月 28 日、北海道開拓記念館講堂。北海道開拓記念館主催事業。
(4) 出利葉浩司、19 世紀末の斜里アイヌの暮らしーヒッチコックの記録をとおして、斜里町立知床博物館、2012 年 7 月 14 日、北海道立アイヌ民族文化研究センター主催事業。
(5) 山崎幸治、アイヌ物質文化の現代的意義とその活用、国際シンポジウム　温故知新－アイヌ文化研究の可能性を求めて－、2011 年 11 月 11・12 日、国立民族学博物館。国立民族学博物館主催事業。
(6) 出利葉浩司、N.G. マンローのアイヌ文化研究とそのコレクション－『海を渡ったアイヌの工芸展』を中心に－、南山大学人類学博物館オープンリサーチセンター主催歴史部会国際シンポジウム、2010 年 10 月 9 日、南山大学名古屋キャンパス、南山大学人類学博物館オープンリサーチセンター主催事業。
(7) MIYATAKE,Kimio, Ainu in London, LSE・国際交流基金主催日英博覧会 100 年記念シンポジウム、2010 年 6 月 15 日、LSE（ロンドン市）、LSE・国際交流基金主催事業。
(8) 山崎幸治、博物館のアイヌ展示に集う人たち、日本文化人類学会主催シンポジウム『人類学とアイヌ研究－日常としてのフィールドワーク』、2010 年 11 月 3 日、北海道大学学術交流会館、日本文化人類学会主催。
(9) 山崎幸治・川上将史、アイヌ文化について、国際交流基金 JENESYS 東アジア次世代リーダー招へいプログラム「文化の多様性の再認識：アジア・オセアニア地域の可能性」、2010 年 12 月 17 日、東京都八重洲アイヌ文化交流センター、国際交流基金主催事業。

６．研究組織
(1)研究代表者
・出利葉　浩司（DERIHA KOJI）
北海道開拓記念館・学芸副館長
研究者番号：40142088
(2)連携研究者
・宮武　公夫（MIYATAKE KIMIO）
北海道大学・名誉教授
研究者番号：50291993
・財部　香枝（TAKARABE KAE）
中部大学・国際関係学部・准教授
研究者番号：00421256
・矢口　祐人（YAGUCHI YUJIN）
東京大学・大学院総合文化研究科・准教授
研究者番号：00271700
・池田　貴夫（IKEDA TAKAO）
北海道開拓記念館・学芸部・研究員
研究者番号：30300841
・山崎　幸治（YAMASAKI KOJI）
北海道大学アイヌ・先住民研究センター・准教授
研究者番号：10451395
・田村　将人（TAMURA MASATO）
札幌大学・特命准教授
研究者番号：60414140